

## 1960年代国際ドル市場におけるロンドンとニューヨーク：BOLSAの事例

東北大学 菅原歩

本報告の目的は、1960年代を対象に、中核的国際金融センターであったロンドンとニューヨーク（以下、NY）の補完的関係を明らかにすることである。それ以前の時代と比較すると、1960年代の時代的特徴はドルの単一基軸通貨化とユーロダラー市場の登場であった。国際金本位制期はポンドの単一基軸通貨制であり、ロンドンが単一の中核的国際金融センターであった。戦間期には、ポンドとドルの複数基軸通貨制と、ロンドンとNYという中核的国際金融センターの並存が生じた。第二次大戦後は、1958年の西欧主要国通貨交換性回復以降はドルの単一基軸通貨制となった。しかし、国際金融センターはNY単一の中核金融センターとはならず、NYとロンドンの複数中核金融センター並存となった。これはロンドンでのユーロダラー市場の成立によって生じた。これ以降、ドル単一基軸通貨制とロンドン・NY複数中核金融センターの構造は基本的に現在まで続いている。

本報告では当時のロンドン・ユーロダラー市場で英系最大手であった英系海外銀行BOLSA（Bank of London and South America）の1960年代の与信枠設定の史料（ロイズ銀行アーカイブ所蔵）を利用する。借り手としては日本の銀行・企業に着目する。まず日系銀行向けでは、BOLSAの与信枠設定は、ほとんどがロンドン支店・本店（BOLSAはロンドンに本店と支店の2店舗を持っていた）ではなく、NY支店によって行われていた。しかし、非銀行向けでは、BOLSAの与信枠設定はすべてロンドン支店を介していた。ただし、この非銀行向けの与信枠にはすべてNY支店から与信枠を受けた日系銀行による保証がついていた。ここから、BOLSAがドル供給地としてロンドンとNYを補完的に利用していたことを読み取ることができる。しかもBOLSA会長のBoltonは回顧の中で「これ（ユーロ市場の登場）は、主要な金融センター間の、かつてみられなかった程の協力と協調を引き起こした」と述べている。これらの事実発見からは、Schenk(2002)の言うような金融センター間の補完的関係について今後研究を深めるべきということが示唆される。日本の事例からは、国際ドル市場（NY市場+ロンドン・ユーロダラー市場）は、借入国の貿易金融・国内投資のいずれに対しても円滑な資金供給という機能を果たしたことも示された。

付記：本報告は、JSPS 科研費 16K03766の助成を受けた研究成果の一部である。